

芸術の秋

T. G

最近、久しぶりに会った人から「高尚な趣味をお持ちですね。」とよく言われます。フェイスブックを始めておおよそ2年。バッハ・コレギウム・ジャパン（BCJ）を始め、コンサートの話題を載せることが多いからだと思います。

どうやら、クラシックコンサートに出かけるのは高尚なこと、というのが一般のイメージのようです。私もそんな一人でした。結婚前はロックのライブやフェスにはよく行っていましたが、クラシックのコンサートに行こうなどと思ったことはありません。クラシックなんて、退屈でおもしろくないだろうという思いが強かったのです。しかし、二つの出会いによってその考えはくつがえされました。

一つ目は、ドラマになった「のだめカンタービレ」を観たことです。ドラマや映画を通して定番の曲を知るようになり、クラシックの音楽ってけっこういいじゃんと思うようになったのです。

二つ目は、S.Mさん、Yくん親子との出会いです。Yくんとは青年会のころに知り合いました。青年会のクリスマス礼拝で、生演奏をBGMにして聖書朗読をしようという企画を立てたのです。オーケストラは楽器を弾ける青年たちに、オルガンはYくんにお願しました。今思えば贅沢なクリスマス礼拝だったと思います。その後、妻が恩寵教会でYくんと幼なじみだったこともあり、気がつく機会あるごとにYくんのコンサートへ出かけるようになりました。

そんな中、Yくんの家でお父さんのMさんから、コンサートのレクチャーをしてもらおうという話になりました。その頃の私は、カンタータもコラールも分からない全くの素人だったのですが、せっかくの機会なのでお邪魔することにしました。

どんなに難しい話を聞かされるのだろうと心配しながら伺ったのですが、Mさんの話はとても面白く、どんどんバッハの世界に引き込まれてしまいました。

バッハがいかに信仰をもって作曲をしていたのか、一音一音にどんな意味が隠されているのか、聞けば聞くほど、バッハの凄さが伝わってきて、これはもうコンサートを聞きに行くしかないという感じです。

初めて行ったコンサートは素晴らしいものでした。

バッハは音楽によって神様の栄光を表し、Mさんはその音楽をその当時の音色で聴衆に届けてくれました。その音楽は神様の素晴らしさを全ての人に感じさせるものでした。Mさんの放つ素晴らしい音色の奥に、同じ改革派の信仰が根ざしていると思うと、とても誇らしく嬉しい気持ちになりました。

BCJのコンサートに行くといつも元気になります。私も神様の栄光を表して生きていこうと、勇気づけられます。これは高尚な趣味なんかではなく、私にとっては生きる上で必要な栄養補給と同じなのです。

真の芸術は神様の栄光を表すものであり、その作品に触れることで私たちは生きる元気をもらえるのだと思うのです。みなさんもコンサートで元気をもらいませんか？

「何に対して祈るのか」

K. S

私が横浜中央教会を初めて訪ねたのは、約4年前のクリスマス礼拝でした。教会を訪ねるまでには、私なりにとても長い道のりがありました。その経緯は複雑で、ここでは書ききれない思いもあるため、私の子供時代の話を書こうと思います。

私は一般的な日本家庭に生まれ育ったので、彼岸や盆には当然のように墓参りに行き、法事はできる限り出席し、よく意味のわからないお経を覚えようともしました。お経の漢字の羅列に「どういう意味があるのだろうか?」と思ったものの、小学生の頃ですから自分で調べようともせず、うやむやになったまま時間が過ぎました。

その後も墓参りや葬儀に出てお経を聞きながら、合掌をする時間になると「私は一体何を拝んでいるのだろうか?」という疑問が生まれましたが、周りにある答えは混沌としたものばかり。

小学生の頃からしばらく続いた私の癖(習慣?)ですが、夜お布団に入ると、誰を相手にするでもなく手を組み合わせて心の中で「今日はこんなことがありました。私はこうしたけれど、それは果たして正しかったのでしょうか?どうぞ明日はいいことかありますように」とお祈りをするようになったのです。

ですが答えてくれる相手はいませんし、そんなことをしながらも「私は一体何に対して祈っているのだろうか?」という疑問は晴れませんでした。

紆余曲折を経て、4年前のクリスマスに横浜中央教会を訪ねた際は、心身ともに疲れ果て、「今の私は一体何を信じれば良いのだろうか?家族に支えられて幸せではあるけれど、求めている何か足りない」という思いでした。それが教会で初めて聖書の話聞き、「やっと出会えた」という充足感が自分の中に満ちたのです。

聖書に書かれた言葉は母からよく言って聞かされた言葉にそっくりでした。母は一度も聖書を読んだこともなければ、教会に通ったこともありません。でも私が子供の頃から受けていた母からの教えは、聖書に書かれていることに非常に似通っていたことを知り、母の周りにも本人が知らずのうちに主がいたことを実感しました。母がまだそれに気づいてくれないのは残念ですが、これも私の折りの課題だと思って過ごしています。

主は既に私たちの周りにいらしたのだ、ということがハッキリと分かりとても安心したのが、私が初めて横浜中央教会を訪れた時の気持ちでした。

一人でも多くの人がその存在に気付きますように

数年前から“チェンジ”や“変化”と言う言葉が盛り上がった時期を機に、私たちの生活にもあらゆる所に急スピードで様々な変化がもたらされました。

その中でも一番身近なものとして、通信機器の変化が感じられます。

携帯電話やパソコンを使ってメールや文書を作成する際には、漢字が苦手な私にとって自動変換をしてくれる機能がついているのでとても使いやすく感じています。機器によっては使いこなすことが難しい物も沢山出てきており、徐々に慣れる様にはなりますが、時々、ここまで便利になる必要があるのかなと考えさせられる時もあります。

小さい頃は、テレビのチャンネル回しがとても面倒に思う時があり、その頃は“伸びる手”の魔法が出来ればいちいち近くまで行ってチャンネルを回さなくても済み、楽で良いのと思っていた事が、今やテレビと言えバリモコンが付属していて当たり前で、とても便利になっています。

それがどんどん進化して色々な機能が付け加えられ、複雑になりすぎ逆に無駄な時間を費やす事もしばしばあります。昔は一般的に知らない事がある時は、まず詳しい人に聞くのが普通でしたが、今は身近で正確に教えてくれる機器が普及した事で、人に聞いて理解する事よりも機器での情報に頼る時が多くなり、従って人との会話も随分減ってしまいました。

この様に進化を続け利便性が上がり、良い事も沢山ある時代の中でいつまでも変わらないでそのままで欲しい事も沢山あります。

例えば

公園の周りを流れる小川のせせらぎの音
 新緑の季節になると黄緑の葉っぱの間からさんさんと降り注ぐ木漏れ日
 しばらくぶりに聞く友たちの優しい声
 良い買い物が出来た時の嬉しい気持ち
 あやすとニッコリ笑う赤ちゃんの笑顔
 感動を受けた時に自然にこぼれる涙
 病気の時優しくなでてくれる母の温もり

これらの感覚、感動の気持ちだけは幾つもの時が過ぎようとも変わる事無くいつまでも続いて欲しい事です。